

巢内の構造を研究し、材料を蒐集するのは仲々面倒で容易に渉らない。數尺も掘り下け得れば上出来である。私は只一度十五呎堀下けて蟻房や通路の構造を研究した事がある、地下十五呎、それも直径十呎乃至十二呎の廣さである。斯く廣い巢を作つた蟻の努力は如何であらう。この蟻工事の只一の道具は顎である。私は數種の蟻の顎を調べて見て興味ある事實を發見した。常態にては鋭い齒がチャンコして居るが、よく研究して見るに職蟻の齒は磨滅して雜多の状態を呈して居り、全く無齒の蟻もある。

米國にはこの *barbatus* の外に數種の收穫蟻が居る。フロリダ收穫蟻 (*Pogonomyrmex erudelis*) ペンシルバニア蟻 (*Pheidole pennsylvanica*)、オクシデント蟻 (*Pogonomyrmex occidentalis*) 等が其である。

蛙の腹から出た珍しいハムシ (湯淺 啓温)

此頃西ヶ原農事試験場では、岡田彌一郎氏が蛙の食性調査をやつて居られるので、時々面白い例に出會す。茲にはハムシ科 Chrysomelidae, ネクヒハムシ亞科 Donaciinae の一種を報告しておく。

今述べようとするハムシを吞込んで居た蛙は 1925 年 4 月 23 日千葉縣松戸で採集された雄のトノサマガエル *Rana nigromaculata* HALLOWELL (標本番號 24) で、體長 55mm のものである。

出て來たのは一頭の完全な成蟲で、學名は *Haemonia japona* さいひ 1885 年 Jacoby が Lewis の豐顯寺の池で採つた (四月) 只一頭の標本から新種として記載して (Proc. Zool. Soc. Lond. 1885, p. 190, pl. xi, fig. 1) このかた、再び採集、記載されたるを見ない。この屬のものは成蟲も水中に居るさいふから、それで採集家の眼にも入り難く、捕へられないで、却つて蛙の腹から出て來たさいふ譯であらう。こにかく、珍しいものである。

本邦産ネクヒハムシ亞科は *Haemonia*, *Donacia*, *Plateumaris* の三屬に分れ、*Haemonia* 屬は僅にこの *japona* 一種のみが知られてゐるから、次に屬の檢索表を、この種の記載を簡單に記して、採集家の便に供したい。

ネクヒハムシ亞科、屬の檢索表

a 跗節末端節は極めて長く、棍棒狀、第一乃至第三節を合したるよりも長い。第三跗節は先端凹形でない。翅鞘端は截形をなし、外角に刺を有す。成蟲も水中生活をなす。

Haemonia LATREILL

a' 跗節は普通、第三節は先端深く凹陷して二裂する、末端節は他の三節を合したるよりも長くない。翅鞘端には著しい刺を有しない。

b 體は扁平、脛節は細長、翅鞘縫合線は先端に於ても單純で眞直である。

Donacia FABRICIUS

b' 體は背面穹狀に膨起し、脛節は強大、翅鞘縫合線は後方先端に近く離れて居る。

Plateumaris THOMSON

Haemonia japona JACOBY. キイロネクヒハムシ(新稱)

體の腹面は黑色、背面は黄褐色、頭部、觸角、前胸背前縁及び三縱條は黑色、觸角は體長の半に達し、第二及第三節は短く、略同長、第四節は僅に長く、末端の二節は細く且つ最も長い。前胸背は長ささ幅殆んど等しく、略四角形、兩側は大約眞直なるも中央部から基部にかけて少しく内方に凹み、前後兩縁は略眞直である。前胸背上には點刻なく、中央に深い黒條縱走し、其の兩側を同じく二黒條が斜走する。稜狀部は長く、黑色、細かい絹狀の軟毛に被はれて居る。翅鞘には二條づゝからなる五ヶの黑色點刻列があり、間室は隆起する。翅鞘端は截形で、外角は突出して黄褐色の著しい刺をなす。後脚第一跗節は第二第三兩節合せたると同長。腿節、脛節及び跗節の末端は暗色。體長 4.4 mm.

終りに、この珍しい材料を供給された岡田彌一郎氏に厚く感謝の意を表しておく。(西ヶ原農事試験場にて。)

キヲビベツカウバチの寄生蠅 (山中 正 夫)

本誌前號に佐藤覺氏及矢野先生によつて、テウセンギングチバチ及チガバチの寄生蠅の觀察が載つて居たので、私も昨年八月伊豆大島で觀察したキヲビベツカウバチの寄生蠅に就いて少し書て見る。